

清水ヶ丘の風

ハルモニーコール楽事通信第34号

2017年7月29日

マタイ受難曲 各論-6 (第16,17,18,19,20,21,22曲)

第16曲 レチタティーヴォ(エヴァンゲリスト、イエス、ペトロ)

(前号から続く) このときのペトロは自信満々で、「たとえ皆があなたにつまずいても」「ご一緒に死ぬようなことがあっても」決してイエスを裏切らないと誓います。ペトロは「筆頭使徒」といわれ、後に初代教皇となる人物で、イエスが「私はこの岩(ペトロ)の上に私の教会を建てる」と言ったほどの信頼を得ていた弟子であったので、自分だけは、自分こそは、という気負いがあったのでしょうか。筆者がペトロを熱血漢と言ったのは、この誓いとその後まさに捕縛されようとするイエスを救うべく、剣を抜いて追っ手の耳を切り落とす(ヨハネ福音書による)という実力行使に出たことから出た言葉です。筆者はイエスに忠誠を誓い、時には暴力も辞さない強さと、そのイエスを3度否み、鶏の鳴き声に後悔して激しく泣くという弱さを併せ持ち、最後はローマで殉教するという、いかにも人間くさいペトロが好きです。

第17曲 コラール「私はここでお傍にとどまります」(4声合唱、オーボエ1,2, 弦楽器、通奏低音、変ホ長調)

このコラールと第15曲のコラールはいずれも原曲(P. ゲアハルト「おお御頭、血と傷にまみれ」)と同じく、ここでは第6節が歌われます。同じコラールは全曲に5回登場しますが、第15曲と第17曲だけが同じ編曲を用いています。ただし調性はホ長調から変ホ長調に半音下げられています。これを前曲の牧歌的な世界から人間の心の問題への切り替えと見る向き(礒山)もありますが、実際に歌ってみればむしろ緊張した訴え(15曲)と親密な約束(17曲)といった趣があります。これはキイが半音下がったことと、シャープ3つとフラット3つという調性の違いに由来すると考えられます。だからこそ終わりの一行「私はあなたを抱きしめます、この腕と懐の中に」という歌詞が、柔らかなハーモニーに溶け込んでくるのではないのでしょうか。

歌詞の内容はペトロと誓いを共にする信徒の心を告白したもので、この後に出てくる自由詩のアリアと合唱(第20曲)にも関連します。

第18曲 レチタティーヴォ:ゲッセマネの祈り(エヴァンゲリスト、イエス)

イエスは「ゲッセマネの園」という所にペトロとゼベダイの子二人(ヤコブとヨハネの兄弟)を連れて行き、悲しみにもだえながら、自分が祈っている間眠らずに待っているよう三人に命じます。

第19曲 レチタティーヴォ・アコンパニヤートとコラール「おお、何という痛ましさよ」(テノール、4声合唱、フルート1, 2, オーボエ・ダ・カッチャ1,2, 弦楽器、通奏低音、4/4拍子、ヘ短調)

途中に挿入されるコラールの部分を除き、終始一貫せわしく16分音符のトレモロを刻む通奏低音に乗って、ギクシャクとした音型を奏でるオーボエ・ダ・カッチャ1、フルート1(ユニゾン)とオーボエ・ダ・カッチャ2、フルート2(ユニゾン)のカノンに導かれてテノールが「おお、何という痛ましさよ」と歌い出します。これは第18曲で語られたイエスの言葉「私の魂は死ぬばかりに悲しい」を受けたもので、イエスとともにゲッセマネの園にいた3人の弟子の内の誰か、おそらくはペトロ(「シオンの娘=信徒」という説もあり)の心中を想って書かれた詩(ピカンダー作)と考えてよいでしょう。ここでは裏切られ、捉えられ、殺されることを悟った「人の子」イエスの悲しみに、深く同情する弟子(信徒)の気持ちが率直に現れています。

そこに4声合唱のコラール(ヘールマン「心から愛するイエス」の第3節)が「全てのこのような苦しみの、原因は何なのですか」と問いかけます。ここではトレモロのリズムと管楽器の音は途絶え、弦楽器と通奏低音が合唱の各声部を重複します。レチタティーヴォとコラール合唱の掛け合いは「クリスマスオラトリオ」にも登場しますが、いずれもソロの自由詩が訴える言葉にコラールが応える形です。この曲では、前曲の聖句と深く結びついた自由詩とコラールの関係が見て取れます。ちなみに、この曲で使われたハ短調は、バッハにとって強い悲嘆を表す調性と言われています。

第20曲 アリアと合唱「私はイエスの許で目覚めていよう」(テノール、4声合唱、オーボエ1、フルート1,2、弦楽器、通奏低音、4/4拍子、アンダンテ、ハ短調-ト短調-ハ短調、andante)

「マタイ受難曲」には数多くの(あるいはすべてが)名曲と言うべきアリアがありますが、筆者にとってこの第20曲は有名な第39曲「憐れんでください、私の神よ(主よ、憐れみたまえ)」と並んでツートップといいほどの名曲に思えます。なんと言ってもオーボエが先導し、テノールが引き継ぐ主題の旋律が素晴らしい。

オーボエ、テノール、通奏低音によるトリオという、室内乐的編成の中で吹き鳴らす独奏オーボエの音はまさに嫺々(じょうじょう:風のそよそよと吹くさま「広辞苑」といった趣がありますが、同じ旋律に「私はイエスの許で目覚めていよう」という歌詞を乗せたテノールの歌声は、悲壮でありながら毅然としていて感動的であり、筆者に言わせればこれはペトロの「決意表明」です。

「Ich will bei meinem Jesu 私はイエスの許で」は属音(ト、g)と装飾された主音(ハ、c)、そしてオクターブ高い属音(ト、g)で歌われ、当然ながら私(一点ト)とイエス(二点ト)の音高には1オクターブの開きがありますが、神と人との関係性からでしょうか、完全協和音程を保っています。これを受ける合唱も「そうすれば私たちの罪は眠りに入る」とテノールに同意し励まします。合唱にはフルート1, 2と弦楽器が寄り添います。

曲は中間部から「私の死はあの方の魂の苦しみで贖(あがな)われ、あの方の苦しみが私を喜びで溢れさせる」の歌詞となり、「Meinen Tod 私の死」の Tod(死)と「seine Seelennot あの方の魂の苦しみ」の Not(苦しみ)はロングトーンで強調され、「Freuden 喜び」は短調ながら華やかなメリスマで彩られます。ソロが一旦終わると合唱はト短調に転じて、同じ音型で「bitter und doch süße sein だから私たちにとってあの方の誉れある受難は、苦くとも甘美なもの」と引き取ります。その後提示部の再現があり、最後は再びオーボエのソロとなって曲は終わります。全体の構造はシンメトリカルで、均整のとれた印象を受けます。

なお、この曲と第27曲にはバッハの作品としては珍しく、作曲者自身によるテンポの指示があります。

第21曲 レチタティーヴォ(エヴァンゲリスト、イエス)

イエスは少し進んでひれ伏し、祈ります「父よ、できるならこの杯を私から過ぎ去らせてください。しかし私の願い通りにではなく、貴方の御心のままに」。「ist's möglich できるなら」と「Kelch 杯」には高い変ホ(es)音が与えられます。イエスはこの祈りを一度弟子たちの所に戻った後、再び神に捧げますが、そのときすでに彼の心は決まっていた。

第22曲 レチタティーヴォ・アコンパニヤート「救い主は御父の前にひれ伏せられる」(バス、弦楽器、通奏低音、4/4拍子、ニ短調、a tempo(テンポを守って))

ここでようやく自由詩を歌うバスの登場です。ひれ伏すイエスの姿を描写するかのよう、弦楽器は下降音階で頭を下げる動作を繰り返します。ただ一カ所「hinauf zu Gottes Gnade wieder 神の恵みに高めて下さる」の言葉を受けて、一オクターブ半の上昇に転じるほかは。(以下次号に続く)

【後記】 いま楽事の一員として「マタイ」公演に向けた舞台設営やオーケストラの出番を考えつつ、それが一区切りついたところで楽事通信の執筆に当たっています。一方で煮詰まると他方に逃げてはリフレッシュしています。(新井)